

## 令和4年度 戦争にまつわる体験談

### 「五歳が見た戦中・戦後」

新田 紀久子さん (82歳)

物心がついたころは戦争中だった。防空頭巾はいつも手元にあり、夜も枕元に置いていた。サイレンの音や「空襲警報発令」の声にすばやくかぶり母に手を引かれて、近くの防空壕に逃げた。父は病弱だったのと、仕事の関係で戦地には行っていなかったが留守がちだった。

あるとき、逃げ遅れて、一人家の中に残され、神棚の下で耳をふさいで震えていたことをはっきりと覚えている。空襲が激しくなり毎日のようにサイレンが鳴り、飛行機の音がひっきりなしに聞こえた。

当時住んでいた西宮には海軍用の航空機を急造していた川西航空機の工場があった。父はいつかそこが爆撃されるだろうと予測したのか、自分たちの実家がある田舎に、姉と私をあずけたのである。それ以降空襲の恐ろしさは知らなかったが、両親や姉妹と離れ、一人で心細く、とてもさびしかった。そんな私を祖母はいつもぎゅっと抱きしめてくれた。

私が、戦争は二度と嫌だとの思いを強くしたのは、終戦後である。食糧難や物不足で混乱していた。西宮の家は焼けずにすんだが、焼け跡が点在し、街は薄暗い感じだった。

休みになると父は姉と私を連れて田舎へ行った。そのころ、高松へ行くには宇野港(\*岡山県)から連絡船に乗っていった。列車が宇野港に着くと父は私の手を握り姉に向かって「走るぞ」と、言って走り出した。私は父の手をしっかりと握り必死に走った。周りの人々も皆走っていた。船はぎゅうぎゅうで体を動かすのもやっとなかった。

帰りはほとんどの人が大きな荷物を抱えていた。姉と私の背中には小さなリュックがはちきれそうに膨らんでいた。お米が入っていたのである。棍棒こんぼうを持った警察官が人々を縫うようにして、歩きまわっていた。そして誰かれなく捕まえては荷物を取り上げていた。荷物を取られた人は必死になって取り返そうともみ合っていた。警察官は棍棒を振り上げ、打ち据えていた。恐ろしくて父にしがみついていた。そんな光景を何度見たことか。そのことからしばらくは警察官を大嫌いになった。

国民学校に入学した最後の年代で、2年生からは小学校になった。教科書もわら半紙を折った物から、絵が入って少し綺麗になった。文字もカタカナからひらがなが変わった。

学校では子どもどうして、よく戦争の話をした。ある子は「西宮の浜には死んだ人たちがごろごろしていた。そんな人たちを踏んだり、またいだりして逃げた。そのことを思い出すと怖くて時々夢に見る」と言っていた。小学校時代の友人には戦争で父親を亡くした人が多かった。